

## 平成 2 0 年度病虫害発生予報第 4 号

平成 2 0 年 6 月 5 日  
鳥取県病虫害防除所

### 予報の概要

区 分	農作物名	病 害 虫 名	発生時期	予想発生量
普通作物	イ ネ	いもち病(葉いもち)	平 年 並	平 年 並
		縞葉枯病(ヒメトビウンカ)	平 年 並	少 ない
		ニカメイガ(第1世代)	平 年 並	少 ない
		イネミズゾウムシ	-	やや少ない
果 樹	ナ シ	黒斑病	平 年 並	やや多い
		黒星病	平 年 並	やや多い
		輪紋病	平 年 並	やや多い
		アブラムシ類	やや遅い	平 年 並
		ニセナシサビダニ	やや遅い	少 ない
		シンクイムシ類	平年並~やや遅い	やや多い
	カ キ	落葉病	平 年 並	やや多い
		カキノヘタムシガ	平 年 並	平 年 並
	ブドウ	べと病	平 年 並	やや多い
		チャノキイロアザミウマ ハマキムシ類(チャノココクモンハマキ)	平 年 並 平 年 並	平 年 並 平 年 並
リンゴ	ハダニ類	平 年 並	平 年 並	
野菜・花き	スイカ、メロン	つる枯病、炭疽病	平 年 並	平 年 並
		うどんこ病	平 年 並	平 年 並
		アブラムシ類	-	平 年 並
		ハダニ類	平 年 並	平 年 並
	イチゴ	うどんこ病	平 年 並	平 年 並
		炭疽病	平 年 並	平 年 並
		アブラムシ類	-	平 年 並
		ハダニ類	平 年 並	平 年 並
	ネ ギ	さび病	平 年 並	平 年 並
		黒斑病	平 年 並	平 年 並
		ネギハモグリバエ ネギアザミウマ	平 年 並 平 年 並	やや少ない 平 年 並
	ブロッコリー	コナガ	平 年 並	平 年 並
シ バ	葉腐病(ラージパッチ)	平 年 並	平 年 並	
	シバツトガ	平 年 並	やや多い	

### [ 参考 ]

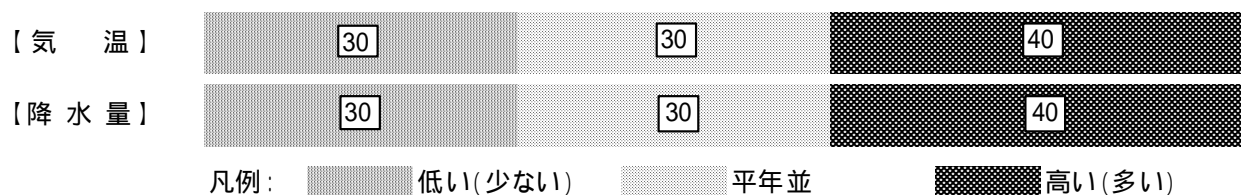
#### 気象予報(抜粋)

1 か月予報(予報期間: 5 月 3 1 日 ~ 6 月 3 0 日、5 月 3 0 日 広島地方気象台発表)  
向こう 1 か月の出現の可能性が最も大きい天候と特徴のある気温、降水量の確率は以下のとおりです。

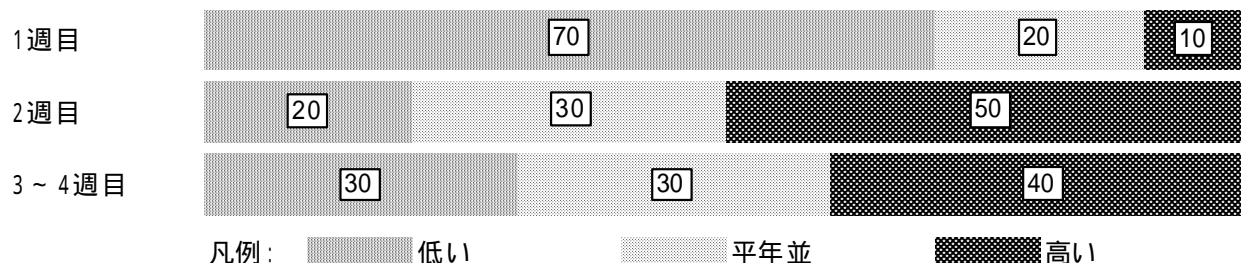
平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

週別の気温は、1 週目は低い確率 7 0 %、2 週目は高い確率 5 0 % です。

<向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率(%)>



<気温経過の各階級の確率(%)>



## 普通作物

### 【イネ】

#### 1 いもち病(葉いもち)

##### (1) 予報の内容

発生地域 県下全域  
発生時期 平年並  
発生量 平年並

##### (2) 予報の根拠

ア 昨年の穂いもちの発生は少なかったことから、種子の保菌率も低いと予想される。

イ 苗いもちの発生はほとんど認められていない。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、発生にやや助長的であると見込まれる。

##### (3) 防除上注意すべき事項

ア 移植後は、ほ場をよく観察して早期発見に努め、急性病斑がみられた時は、粉剤又は水和剤で直ちに防除を行う。

イ コシヒカリ、ひとめぼれなどの本病に弱い品種、多肥、遅植えなどの条件では特に発生しやすいので注意する。

ウ 補植用苗が本病の発生源となることが多いので、補植が終わったら放置せず、早めの処分を徹底する。

#### 2 縞葉枯病(ヒメトビウンカ)

##### (1) 予報の内容

発生地域 県下全域  
発生時期 平年並  
発生量 少ない

##### (2) 予報の根拠

ア 向こう1か月の気象予報によると、第2世代幼虫のふ化最盛期は平年並の7月上旬頃になると予想される。

イ 昨年の本病の発生量は少なかった。

( 3 ) 防除上注意すべき事項

- ア 本病の常発地で、ヒメトビウンカに登録のある育苗箱施用剤を使用していない場合には、第2世代幼虫のふ化最盛期（7月上旬頃）に、粉剤や粒剤などを散布する。
- イ 本種はイネの葉色が濃いほ場に発生しやすいので、窒素過多にならないようにする。

3 ニカメイガ（第1世代）

( 1 ) 予報の内容

発生地域	県下全域
発生時期	平年並
発生量	少ない

( 2 ) 予報の根拠

- ア 向こう1か月の気象予報によると、発蛾最盛期は平年並の6月中旬頃になると予想される。
- イ 5月第6半旬までの予察灯及びフェロモントラップへの総誘殺数は、平年に比べて少ない。

( 3 ) 防除上注意すべき事項

本種に登録のある育苗箱施用剤を使用していないほ場において、若齢幼虫期（6月下旬）に要防除水準を超えた場合には粉剤などを散布する。なお、6月下旬における本種の要防除水準は、葉鞘変色茎率5%である。

4 イネミズゾウムシ

( 1 ) 予報の内容

発生地域	県下全域
発生量	やや少ない

( 2 ) 予報の根拠

5月第6半旬までの予察灯への総誘殺数は、平年に比べてやや少ない。

( 3 ) 防除上注意すべき事項

- ア 移植期の防除を行っていないほ場、又は移植期の防除を行っていても成虫の寄生数及び食害が多いほ場において、要防除水準を超えた場合には、粒剤や粉剤などを散布する。なお、本種の要防除水準は成虫寄生密度0.5頭/株である。

## 果 樹

### [ ナ シ ]

1 黒斑病

( 1 ) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	やや多い

( 2 ) 予報の根拠

- ア 県予察ほ場（北栄町）における5月第6半旬の孢子飛散数は、平年を上回った。
- イ 5月下旬現在、幼葉や幼果などで本病の発生が一部のナシ園で認められる。
- ウ 向こう1か月の気象予報によると、発生量はやや多いと予想される。

( 3 ) 防除上注意すべき事項

- ア 6月になると新梢葉が多くなり、薬液の付着むらが出やすいので、新梢の先端まで薬液が十分かかるよう注意する。
- イ 薬剤はジラム・チウラムフロアブル（ダイボルトフロアブル又はパルノックスフロアブル）500倍とポリオキシシナール水和剤1,500倍の混用液、アントラコール顆粒水和剤500倍液、ナリアWDG2,000倍液などを使用する。
- ウ 園内の風通しをよくするため、下草の管理を徹底する。

2 黒星病

( 1 ) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	やや多い

( 2 ) 予報の根拠

- ア 5月下旬現在、幼葉や幼果などで本病の発生が県内全域のナシ園で散見される。
- イ 向こう1か月の気象予報によると、発生量はやや多いと予想される。

( 3 ) 防除上注意すべき事項

- ア 発病した葉や幼果は取り除き、園外に持ち出し処分する。
- イ 赤ナシの有袋栽培では、袋掛け直前に必ず薬剤散布を行って袋掛けを行う。
- ウ 薬剤はアントラコール顆粒水和剤500倍液、オキシラン水和剤600倍液、ナリアWDG2,000倍液などを使用する。また、現在、発生が認められる園では、直ちに通常の防除に加えて、孢子形成阻害効果の高いEBI剤（アンビルフロアブル1,500倍液、マネージ水和剤4,000倍液、スコア顆粒水和剤4,000倍液）などを追加散布する。

3 輪紋病

( 1 ) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	やや多い

( 2 ) 予報の根拠

- ア 伝染源となるいぼ病斑の発生の多い園が一部のナシ園で認められる。
- イ 向こう1か月の気象予報によると、発生量はやや多いと予想される。

( 3 ) 防除上注意すべき事項

- ア 果実の発病は袋掛けで防げるが、袋掛けが遅れると発生が増加するので、摘果が終わり次第、早めに袋掛けを行う。
- イ 果実及び枝の発病を抑えるため、梅雨期の薬剤散布を徹底する。
- ウ 薬剤はオキシラン水和剤600倍液、ナリアWDG2,000倍液などを使用する。

4 アブラムシ類

( 1 ) 予報の内容

発生時期	やや遅い
発生量	平年並

( 2 ) 予報の根拠

- ア 5月21、22日の巡回調査の結果、本種の発生は平年より少なかった。
- イ 向こう1か月の気象予報によると、本種の発生にやや好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 発生が多いほ場では、アドマイヤーフロアブル5,000倍液などを散布する。
- イ アドマイヤーは、薬剤抵抗性の発達を避けるため連用せず、年1回限りの使用とする。

5 ニセナシサビダニ

(1) 予報の内容

発生時期 やや遅い  
発生量 少ない

(2) 予報の根拠

- ア 5月下旬現在、県予察ほ場(北栄町)における本種の新梢先端葉1枚当たりの寄生個体数は0.2頭(平年:156.0頭)で、平年と比べて少ない。
- イ 向こう1か月の気象予報によると、発生最盛期はやや遅い6月下旬頃と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

第1回目の防除は、発生初期の6月初め頃を目安に実施する。薬剤はコテツフロアブル3,000倍液などを使用し、本種が寄生している新梢先端部に薬液が十分付着するように散布する。なお、園内でクワオオハダニも発生している場合は、コテツフロアブルにかえてダニトロンフロアブル1,500倍液などを散布する。

6 シンクイムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並~やや遅い  
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

- ア ナシヒメシンクイの越冬世代成虫(第1回成虫)の発生盛期は、湯梨浜町で平年(4月中旬)よりやや遅い4月下旬となった。
- イ 現地9地点で調査しているフェロモントラップの誘殺数は、ナシヒメシンクイで越冬世代成虫が前年よりやや多い地点が認められる。
- ウ 向こう1か月の気象予報によると、ナシヒメシンクイの第1世代成虫(第2回成虫)の発生最盛期は平年並~やや遅い6月上中旬頃と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

受粉樹に残っている果実など(裸果)はシンクイムシ類の発生源となるので早急に除去する。

[カ キ]

1 落葉病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並  
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 昨年の本病の発生量は平年並であったため、越冬菌密度は平年並と見込まれる。
- イ 本病は連続降雨により発病が助長される。
- ウ 向こう1か月の気象予報によると、発生量はやや多いと予想される。

( 3 ) 防除上注意すべき事項

薬剤は、落花始め～生理落果期に、有機銅フロアブル（キノドーフロアブル又はドキリンフロアブル）1,000倍液、マンゼブ水和剤（ジマンダイセン水和剤又はペンコゼブ水和剤）600倍液などを10日間隔でそれぞれ1回ずつ散布する。

2 カキノヘタムシガ

( 1 ) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

( 2 ) 予報の根拠

ア 本種の越冬量は平年並と見込まれる。

イ 向こう1か月の気象予報によると、成虫の発生最盛期は平年並の6月上旬頃と予想される。

( 3 ) 防除上注意すべき事項

ア 落葉病の防除時期に合わせてパダンSG水溶剤1,500倍液などを散布する。

イ なお、パダンSG水溶剤は、開花後に発生するチャノキイロアザミウマにも効果がある。

[ブドウ]

1 ベと病

( 1 ) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

( 2 ) 予報の根拠

ア 本病は連続降雨により発病が助長され、施設栽培ではハウスの谷部など雨に当たりやすい場所での発生が多い。

イ 向こう1か月の気象予報によると、発生量はやや多いと予想される。

( 3 ) 防除上注意すべき事項

ア 果粒が大豆大以上になると薬剤散布によって果粉が溶脱するので、果粒が小豆大までにアミスター10フロアブル1,000倍液又はストロビードライフフロアブル2,000倍液などを新梢先端や副梢に十分量散布する。

イ 本病の発生が多い園では、薬剤が果房に直接かからないように注意して、ホライズンドライフフロアブル2,500倍液を散布する。

2 チャノキイロアザミウマ

( 1 ) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

( 2 ) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、県予察ほ場（北栄町）の黄色粘着トラップによる本種の誘殺数は、ほぼ平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報によると、発生が増加する時期は、平年並の6月上旬頃と予想される。

( 3 ) 防除上注意すべき事項

例年発生が多い園では、モスピラン水溶剤 4 , 0 0 0 倍液、バリアード顆粒水和剤 4 , 0 0 0 倍液などを 6 月上旬から中旬に必ず散布する。ただし、果実に直接かかると果粉が溶脱する恐れがあるため、果房にかからないようにする。

3 ハマキムシ類 ( チャノコカクモンハマキ )

( 1 ) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 平 年 並

( 2 ) 予報の根拠

ア 5 月下旬現在、県予察ほ場 ( 北栄町 ) の性フェロモントラップによるチャノコカクモンハマキの誘殺数は、ほぼ平年並である。

イ 向こう 1 か月の気象予報によると、ほぼ平年並の 7 月上旬頃からふ化幼虫の発生が増加すると見込まれる。

( 3 ) 防除上注意すべき事項

防風樹のサンゴジュは本種の発生源になるので注意する。

[ リンゴ ]

1 ハダニ類

( 1 ) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 平 年 並

( 2 ) 予報の根拠

ア 県予察ほ場 ( 北栄町 ) における 6 月上旬の本種の発生量は平年並となっている。

イ 向こう 1 か月の気象予報によると、本種の発生にやや好適である。

( 3 ) 防除上注意すべき事項

本種の発生が認められた場合は、ニッソラン水和剤 2 , 0 0 0 倍液などを散布する。

野菜・花き

[ スイカ、メロン ]

1 つる枯病、炭疽病

( 1 ) 予報の内容

発生時期 平 年 並

発生量 平 年 並

( 2 ) 予報の根拠

ア 5 月下旬現在、現地調査ほ場における本病の発生量は平年並である。

イ 本病は降雨によって発病が助長される。向こう 1 か月の気象予報によると、発生量は平年並と予想される。

( 3 ) 防除上注意すべき事項

ア トンネル内が過湿にならないように換気を行う。

イ 雨滴のあたる箇所又は株元から発病するので、トンネル栽培のスイカの茎葉には雨がなるべくあたらないようにトンネルの開閉を行う。また、薬剤散布は株元にも薬液がよくかかるように丁寧に行う。

ウ 雨の日が続くと発病が増加するので、散布間隔を短くし、雨のやみ間に防除する。

エ 薬剤は、ジマンダイセン水和剤400～600倍液などを散布する。スイカではアントラコール顆粒水和剤400～600倍、ダコニ-ル1000の700倍液などを散布してもよい。

## 2 うどんこ病

### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

### (2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、現地調査ほ場における本病の発生量は平年並である。

イ 本病は、25 前後の気温と乾燥条件で発病が助長される。向こう1か月の気象予報によると、発生量は平年並と予想される。

### (3) 防除上注意すべき事項

ア 既に発病のみられるほ場では、トリフミン水和剤3,000～5,000倍液などを散布する。

イ つる枯病も発生している場合には、スイカではポリベリン水和剤1,000倍液、メロンではポリベリン水和剤1,500倍液などを散布する。

## 3 アブラムシ類

### (1) 予報の内容

発生量 平年並

### (2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場(北栄町)に設置した、黄色水盤における5月下旬までの有翅アブラムシ類の飛来量は平年並である。

イ 5月下旬現在、現地調査ほ場における本種の発生量は平年並である。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、発生量は平年並と予想される。

### (3) 防除上注意すべき事項

ア ハウスの換気部分や出入口には寒冷紗被覆を行い、本種の侵入防止に努める。

イ 薬剤は、DDVP乳剤1,000～2,000倍液、アドマイヤー水和剤2,000倍液などを散布する。スイカのハウス栽培で収穫間近なものは、ハチハチ乳剤1,000～2,000倍液、マラバッサ乳剤1,500～2,000倍液などを散布する。

## 4 ハダニ類

### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

### (2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、県予察ほ場(北栄町)における本種の発生量は平年並である。

イ 現地調査ほ場における本種の発生量は平年並である。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、発生量は平年並と予想される。



(3) 防除上注意すべき事項

発生初期にはニッソランV乳剤の1,000倍液、バロックフロアブル2,000倍液などを散布する。発生がやや多い場合は、カネマイトフロアブル1,000～1,500倍液、コロマイト乳剤1,000倍液などを散布する。なお、コロマイト乳剤は薬害が生じやすいので、他の薬剤との混用散布は避ける。

[イチゴ]

1 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、現地調査ほ場の育苗床における本病の発生量は平年並である。  
イ 本病は気温が20℃前後のやや低温条件で発病が助長される。向こう1か月の気象予報によると、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本ほ場に病原菌を持ち込まないために、特に6～7月の育苗期間中の防除を徹底する。  
イ 防除にあたっては、葉裏へも薬剤が付着するように丁寧に散布を行い、発病初期までは、ベルコート水和剤1,000倍液などを散布する。  
ウ すでに発病している場合には、カリグリーンの800～1,000倍液とバイコラル水和剤又はトリフミン水和剤の5,000倍液を混用散布する。なお、炭疽病も発生している場合にはアミスター20フロアブル1,500～2,000倍液などを散布してもよい。

2 炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、現地調査ほ場の育苗床において、本病の発生はみられていない。  
イ 本病は高温多湿条件で発病が助長される。向こう1か月の気象予報によると、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 育苗期間中、章姫などの罹病性品種については薬剤を定期的に散布する。発病した株の薬剤防除は困難であるため、予防防除を徹底する。薬剤散布にあたってはクラウン部分、葉柄、托葉、ランナーにもよくかかるように丁寧に散布する。  
イ 下葉かきによる傷口、ランナーの切り口などからも感染するので、下葉かきの直後にも薬剤散布を行う。  
ウ 育苗初期の薬剤は、アミスター20フロアブル2,000倍液、ゲッター水和剤1,000倍液又はバイコラル水和剤2,500倍液などを散布する。なお、アミスター20フロアブルには展着剤を加用しない。

- エ 育苗中後期の薬剤は、アントラコール顆粒水和剤500倍液、ジマンダイセン水和剤600倍液、ベルコート水和剤1,000倍液などを用いて、7～10日間隔で予防散布する。
- オ 仮植床は排水良好な無病地を選ぶ。
- カ 本病は露地育苗における降雨や頭上灌水によって発病が増加するため、雨よけ育苗を励行し、頭上灌水を避けて底面給水を行う。

### 3 アブラムシ類

#### (1) 予報の内容

発生量 平年並

#### (2) 予報の根拠

ア 県予察ほ場(北栄町)に設置した、黄色水盤における5月下旬までの有翅アブラムシ類の飛来量は平年並である。

イ 5月下旬現在、現地調査ほ場の育苗床における本種の発生量は平年並であるが、一部で発生量のやや多いほ場が認められる。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、発生量は平年並と予想される。

#### (3) 防除上注意すべき事項

薬剤はスミチオン乳剤2,000倍液(露地栽培での登録)、ベストガード水溶剤2,000倍液などを散布する。

### 4 ハダニ類

#### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

#### (2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、現地調査ほ場の育苗床における本種の発生量は平年並であるが、一部で発生量のやや多いほ場が認められる。

イ 向こう1か月の気象予報によると、発生量は平年並と予想される。

#### (3) 防除上注意すべき事項

ア 本種の発生源となる畦畔雑草に対し、ハービー液剤200倍液を散布するなど除草に努める。

イ 発生初期にニッソラン水和剤2,000～3,000倍液、オサダンフロアブル2,000倍液などを散布する。発生量がやや多い場合は、コテツフロアブル2,000倍液、コロマイト乳剤1,000～1,500倍液(親株床での登録)などを散布する。

## [ネギ]

### 1 さび病

#### (1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

#### (2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、現地調査ほ場における本病の発生量は平年並である。

イ 本病は比較的低温で降雨が多い場合、発病が助長される。向こう1か月の気象予報によると、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 6月に収穫する作型で、すでに発病の多いほ場では、アミスター20フロアブル2,000倍液を散布する。

イ 7月以降に収穫する作型では、6月上旬から、オンリーワンフロアブル1,000倍液、ラリー乳剤4,000倍液などを散布する。発病が増加する場合は、これらの薬剤にカリグリーンの800倍液を混用して散布する。

2 黒斑病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、現地調査ほ場における本病の発生量は平年並である。

イ 黒斑病は気温が25前後で、降雨が多い場合、発病が助長される。向こう1か月の気象予報によると、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 根傷み、肥料不足となると発病しやすいので、ほ場の排水を図り、肥培管理に注意する。

イ 薬剤は、ダコニール1000の1,000倍液、ポリペリン水和剤1,500倍液などを予防散布する。発病後は、ロブラール水和剤1,000~1,500倍液などを散布する。

3 ネギハモグリバエ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、県予察ほ場(北栄町)における本種の発生時期は平年並である。

イ 現地調査ほ場での本種の発生量はやや少ない。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、やや少ない発生量が予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

オンコル粒剤5の3~6kg/10a、ジノテフラン粒剤(アルバリン粒剤又はスタークル粒剤)6kg/10aの株元散布又はアクタラ粒剤5の6~9kg/10aの作条混和などの処理をする。粒剤の効果が切れた後は、アグロスリン乳剤2,000倍液などを散布する。

4 ネギアザミウマ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬現在、現地調査ほ場での本種の発生量は平年並であるが、一部で発生量の多いほ場も認められる。

イ 向こう1か月の気象予報によると、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

定植時の粒剤処理は、ネギハモグリバエの項を参照。粒剤の効果が切れた後は、アクタラ顆粒水溶剤1,000～2,000倍液、マラバッサ乳剤800～1,000倍液、アグロスリン乳剤2,000倍液などを7～10日おきに散布する。なお、同一薬剤の連用は効果が低下するおそれがあるので避ける。

[ブロッコリー]

1 コナガ

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 県予察ほ場（北栄町）における本種の発生時期及び発生量は平年並である。
- イ 6月上旬現在、現地調査ほ場における本種のフェロモントラップ誘殺数及び幼虫の発生量は平年並である。
- ウ 向こう1か月の気象予報によると、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

6月中旬以降収穫のブロッコリーで幼虫の発生がみられる場合、ノーマルト乳剤2,000倍液、プレオフロアブル1,000倍液などを7～10日おきに散布する。なお、防除にあたっては、薬液が葉裏にも十分かかるよう丁寧に散布する。

[シバ]

1 葉腐病（ラージパッチ）

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 5月下旬現在、現地調査ほ場における本病の発生はほとんど認められていない。
- イ 本病は降雨によって発病が助長される。向こう1か月の気象予報によると、発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 本病の発生前にセレンターフ顆粒水和剤0.5gを0.1～0.5L/m<sup>2</sup>散布する。
- イ すでにパッチがみられる場合は、発病部位を中心にグランサー水和剤500倍液（0.5L/m<sup>2</sup>）、バリダシン液剤5の500倍液（0.5～1L/m<sup>2</sup>）などをスポット散布する。

2 シバツトガ

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 5月下旬現在、現地調査ほ場における本種のフェロモントラップ誘殺数は多い。

イ 向こう1か月の気象予報によると、発生量はやや多いと予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

幼虫による被害がみられる場合は、ダイアジノン乳剤40の1,000倍液(0.3~1L/m<sup>2</sup>)、ジェイエース水溶剤1,000倍液(0.3L/m<sup>2</sup>)、スミチオン乳剤1,000倍液(0.3~2L/m<sup>2</sup>)などを散布する。

**[おしらせ]**

農薬は、農林水産省の登録番号のあるものを、ラベルをよく読んで使いましょう。詳しい内容は、独立行政法人 農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報検索システム」から検索できます。( <http://www.famic.go.jp/> )

**農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、  
周辺への飛散には十分注意しましょう。**

**< 鳥取県病害虫防除所ホームページ >**

**アドレス <http://www.jpnpn.ne.jp/tottori/>**

病害虫の発生予察情報やフェロモントラップ調査結果(野菜の各種害虫、果樹のシンクイムシ類)、病害虫の診断方法などの情報をお知らせしています。ご利用下さい。

鳥取県病害虫防除所

〒680-1142 鳥取市橋本 260

TEL : 0857-53-1345、FAX : 0857-53-5647

E-mail : [boujyot@titan.ocn.ne.jp](mailto:boujyot@titan.ocn.ne.jp)

次回の予報発表は、7月3日(木)の予定です。